

はじめに

自分と向き合い、悩みなさい。
そして、どんな瞬間においても、
自分のことを信じなさい

「素晴らしい。ハーバードMBAの連中のプレゼンと遜色ないよ。クリエイティブにはあふれている。学部生だったら、ハーバードやエールよりも上じゃないか」

これは2011年、キムゼミを参観したハーバード・ビジネス・スクールのラマーナ・カーシク教授の言葉だ。

慶應義塾大学のメディア・コミュニケーション研究所は全学部にオープンになっていますが、入所のための競争率は6倍以上になる。研究所内には9つのゼミがあり、その中でも私の主催するキムゼミは最も厳しいゼミだと学生に認知されている。実際、私のゼミは厳しい。おそらく他のゼミでは、まず与えられないような課題を私は与える。あえて、そうしているのだ。ゼミ生の可能性を信じているからだ。

彼らは、私にとって家族同様に大切な存在である。彼らが集まるゼミの時間は、私にとっては何にも代え難い幸せで充実した時間。しかし、彼らはやがて3年間のゼミ生活を終え、卒業の時期を迎える。もう毎週、会うことはできない。

夢と希望、焦りと不安に揺れる青春まつただ中の彼らに自分ができることは何か。そんな自問の中で生まれたのが、キムゼミ最終講義『贈る言葉』だった。それは将来に対する漠然とした不安を抱くゼミ生たちが、今この瞬間から内面的な革命を起こし、これからの人生を支える真の自由を手に入れるための姿勢や考え方、そして行動指針を提示したものである。

多くの大人から見れば、今の若者たちは醒めているように見える。未来について思い悩

んだり、熱く考えたり語り合ったりしないのではないかと。実際、若者たちも、そういう素振りを見せがちだ。しかし、私がじかに接してきた若者たちはそうではなかった。何も考えていないように見えて、彼らは激しく苦悩している。漠然とした何かと戦っている。毎日を悩み、苦しみながら日々を過ごしているのだ。

それは、まさに青春そのものの姿である。青春時代だけに許された、美しさ、素晴らしさだと私は感じる。かつて多くの大人たちが経験した、青春の姿だ。しかし、残念なことに、その美しさ、素晴らしさに誰もが気づくのは、遠く青春時代を過ぎてからである。青春は、通り過ぎた後からしか、その価値には気づけないのだ。

慶應義塾大学にやってきて8年。そんな青春まったただ中にいる若い学生たちと、彼らの夢や悩みを聞きながら日々を過ごしてきた。

私は彼らに「こうしなさい」と言うことは決してない。指示めいたアドバイスは一見、するほうにもされるほうにも有意義に見えるが、実はそうではない。それでは、まったく自己の成長にはつながらないからである。

自分が今、苦悩していること、さらには社会や未来と戦っていくことそのものが、実は

大いなる成長の糧となるのだ。そして、それこそが将来、美しい青春の思い出として残るのである。だから、私は彼らに言う。自分と向き合い、悩みなさい。そして、どんな瞬間においても、自分のことを信じなさい、と。

教育者の役割とは何か。もちろん学生たちが知識を増やし、教養を深め、思考の力を高めることに貢献することは、教育者としての必須条件といえると思う。しかし、それだけで本当にいいのだろうかという気持ちだが、私の中には常にくすぶっていた。だが、学生がそれ以外に求めているかとするなら、それでいいのだろうかとも感じていた。

ところが私がある日、私自身がいかに自分自身と戦ってきたか語ったとき、彼らは極めて強い関心を示した。知識や思考といった「外面的な気づき」ではなく、心を強くするための「内面的な気づき」も彼らが激しく求めていることを知ったのは、このときである。むしろ彼らは、こちらをこそ求めているのではないかとすら私は思った。

そして私は、私自身が自分で実践してきた、自分を強くするための「内面からの革命」について、語るようになった。そしてその集大成として、時間の許す限り、これから社会に出て行く卒業生たちに語るのが、『贈る言葉』である。自らの体験からつむいだこの最

終講義は、卒業していったゼミのOBたちから高い支持を得るに至っている。

本書は、この『贈る言葉』の内容をぜひ書籍にしたい、という出版社からの要望に基づいて、最終講義をベースにまとめたものである。これから社会に出て行く人たちに。社会に出てなお悩みや苦しみを抱える人たちに。さらには、高校生や、年頃のお子さんを持つ親御さんにも、お目通しいただければ幸いである。

私は韓国で高校を卒業して以来、日本、アメリカ、イギリス、ドイツと世界を転々として過ごしてきた。韓国を出たことも、その後、4つの国を渡り歩いたことも理由がある。国を離れて自分を一度リセットし、何もなかったくのゼロからスタートすることによって、自分を大きく変えていきたい、大きく成長させていきたいと考えたからだ。慣れ親しんだ環境をあえて離れることで、理想の自分を追求することが、さらには自分を強くしていくことができると思ったからである。

韓国で生まれた私は、小学校5年生から一人暮らしを求められるという特殊な環境の中に育った。通常であれば、両親の愛情や家族団らんを日々受け入れることができるのが当たり前前の年齢。しかし、それを得られないまま、私は一人で日々を過ごすことになった。おかげで手に入れたのが、自分と向き合うしかない、圧倒的な時間だった。

だが、今も私が間違いないと思うのは、**孤独な体験や苦しい体験は、後の自分を強くし、幸せにしてくれる**、ということだ。自分と向き合い、多くの書物に接する中で、私は幼くして、たくさんの発見することになった。自分自身、さらには周囲について、シビアに見つめる機会を得た。また、生きていく上で何が一番大切なのか、ということにも気づくに至った。

例えば、世の中というものが、いかにうさん臭いか。簡単に信じてはいけないものか。常識や真実といったものの、いい加減さ。私が思ったのは、自分をしっかり持たなければ、こういったものに簡単に翻弄されてしまうのが、世の中だということである。そして、そんな羽目に陥っては、思うような人生を生きることができないということだ。

強くなければ、実は本当に自分が求める人生を生きていくことはできない。強さを身につけることで初めて、得られるものがある。実はやさしさもそうである。

そして人生の本質は、未熟から成熟に向かうことにこそある、と知った。人は何のために生きるのか。自分らしく成長するためにこそ、生きるのだ。

そのためにも**大事なことは、自然体で生きていくこと。自分らしい人生を生きていくこと**である。それは、自分自身が理想とする自分と、そのときどきの自分とのギャップを埋

めることでもある。

私は韓国を出て、日本で、アメリカで、イギリスで、ドイツで自分なりにこのプロセスを進めていく中で、たとえ今、何もかもを失っても自然体のままで生きていくことができる強さを身につけることができた。

今、長く日本で過ごすことになった私が心配しているのは、日本では、多くの人が未来に怯えていることである。もしかすると、自分らしい人生を生きている人が少ないのではないか、自然体で生きている人は多くないのではないか、そんな印象を残念ながら持たざるを得ない。

本当の自分が置き去りにされてしまっただろうか。他者や社会のモノサシに翻弄され、振り回されてしまっていないだろうか。無意識のうちに、何かに媚びて生きているようにすら見える自分がいらないだろうか。

ゼミ生には、そんな人生を送ってほしくなかった。**自分に誇りを持ち、自分を信じ、自分らしく、媚びない人生を生きていってほしい**と私は思った。そこで必要なのが、まず何よりも内面的な強さなのだ。

その方法こそ、**絶対不可侵領域としての自己を確立すること**である。その大切さを、そしてそれを手に入れるための私自身が実践してきた方法を、私はゼミ生たちに伝えたかった。『贈る言葉』は、将来に対する漠然とした不安を抱くゼミ生たちに、今この瞬間から内面的な革命を起こし、人生を支える真の自由を手に入れるための考え方や行動指針を、最後の授業として提示したものである。

社会に革命を起こすことは難しく、時間がかかるものだ。しかし、**内面の革命は今この瞬間にスタートできる。**社会や他者に媚びないと自らを鼓舞し、真に自由な人生を生きるために、その革命に挑んでほしいと私は考える。

内面とは「感情」「思考」「言葉」「行動」の4つで構成される。自分の感情を自分でコントロールできているか。論理的思考を含め、思考で負けないか。難しい言葉を使わず、説得力のある形で言葉を操れるか。思いを行動に移し、結果を受け入れ、そこから学び、自らを成長させられるか。

内面的なこの4つの強さがあれば、自然体になれる。内面的な革命を起こしていくことで、自分の人生の指揮権を取り戻すことができる。

世の中には不可抗力なもの、可抗力なものがある。統制可能なものと、不可能なものがある。未来に何が起きるのかは、まったく統制ができない。しかし、自分の内面は自分で統制することができ、変えることができる。

まずは、**外に目を向けるのをやめ、内に目を向けること**だ。自分と向き合う時間を作ることである。

私自身、早い段階から内面的な革命を起こすことができたおかげで、幸せな日々を過ごしてこることができた。生きてここにいることそのものが、すでに最高の幸せだと気づいたのは、10代の頃だった。すべてを失っても、命がある限り、幸せへの再スタートができる。生きること自体、無限なる喜びがあるということにも、早い段階で気づいた。これも、内面に向き合ってこそ、だった。

多くの若い人たちが幸せに過ごせるように。私は、それを願っている。

内面的な革命を起こしていくことで、
自分の人生の指揮権を取り戻すことができる。